慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	メディア・ナショナリズム論に関する一考察
Sub Title	
Author	高木, 智章(Takagi, Tomoaki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.150- 152
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大会報告要旨 目次のタイトル : メディア・ナショナリズム論に関する一考察 : その「アンビバレンス」, 限界と可能性について
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 21 号（2016）

メディア・ナショナリズム論に関する一考察

高木　智章

本会では「メディア・ナショナリズム論に関する一考察―その「アンビバレンス」、限界と可能性について」という題で発表を行った。なおこの発表を元に同名の論文を作成し、その成果は 2016 年 3 月発行の『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』No.66 に掲載された。ご関心のある方は、ご参照頂ければ幸いである。論文作成は本発表がなければ成し遂げられなかった。学会に感謝の気持ちを最初に述べたいと思う。

私が本発表で「メディア・ナショナリズム」を取り上げた理由には、以下の三つのものがある。

第一に、近年におけるデジタル・メディアの発達は、様々な障壁を超えて情報の相互作用を可能とする「（情報）グローバリズム」の元で、ナショナリズムの相対化の可能性が益々現実的な問題となっている一方で、まだまだメディアのナショナリティ、それに基づくナショナリズムへの呪縛は、そう安々と乗り越えられてはいない、そうしたアンビバレンスに思いを致し、それを現代的な問題として、積極的に取り扱ってみたいという、私自身の思いがあったという点である。そして第二に、「メディア・ナショナリズム」は、そうした極めてアクチュアルな問題であるにもかかわらず、その概念に対する理論的考察が極めて乏しいという現状があったという点である。そして第三には、「メディア・ナショナリズム」という概念を先駆的に、そして唯一と言っていいほど、大々的に取り上げた業績『メディア・ナショナリズムのゆくえ　日中摩擦を検証する』（大石・山本編著）において提示された「メディア・ナショナリズム」の定義が、本文中「マスメディア、およびインターネットなどのニュースメディアの普及が、国民国家のナショナリズムを増幅させる一連の現象」（大石・山本編 2005：傍点筆者）とされており、その偏狭な側面が強調された形で提示された概念であることに、疑義を持ったからである。こうした三つの理由から、私は「メディア・ナショナリズム」の再考をつうじて、「メディア・ナショナリズム」の開かれたあり様を提示する意志を固めたのであった。

本発表の格子を述べるとそれは以下のように要約される。まず私は「メディア・ナショナリズム」の考え方に、社会構築主義的アプローチを適用した。「メディア・ナショナリズム」に社会構築主義的アプローチを採用することは、情報生産者とその受け手との相互作用によって構築される「ネーション」を、究極的には、実体的なものではなく、本来的なものでもないとする視座を獲得することに意義があった。

そうして、「メディア・ナショナリズム」の基盤となる「ネーション」の非実体性を指摘した後、メディアによる「ネーション」の構築過程を、ニュース生産者とオーディエンスのそれぞれの立場に立脚しながら詳細に見ていくことにした。そこで明らかになったのは、メディア

を通じたニュース生産者とオーディエンスの相互作用は、様々な政治的・文化的条件に規定されつつ、「日常的に」展開されるものであるという側面であった。

様々なナショナリズムの形式のなかでも、それがメディアを中心としながら展開される場合、「日常性」というキーワードは非常に重要となった。見ず知らずの人を含めた「ネーション」を想像可能にする基盤は、日々、国民国家の枠組みで情報伝達を行うことの多いメディアの役割が大きく、メディアへの日常的な接触をつうじて人びとは自らのリアリティ（現実認識）を形作るのであるなら、「メディア・ナショナリズム」を考察する際に、非日常的な「ナショナルなもの」の噴出に目を向けることのみならず、むしろかかる「日常性」に関連して分析を展開する意義が十分にあると考えられたのである。

「メディア・ナショナリズム」の社会的構築過程、その日常性を考察していくと、「メディア・ナショナリズム」を非実体的なものとして捉えたとしても、それを規定する様々な「条件」に強く縛られていることが明らかになった。その「条件」とは「国民国家」という枠組みである。世界中様々な情報を伝達する事が可能となっているメディアも、自らの帰属する国民国家の情報を優先的に伝達する傾向がある。そして、そのようなメディアの営為に正統性を与えると考えられるのが、「メディア・ナショナリズム」と「デモクラシー（民主主義）」との関連性である。そこで私は、メディアが拘束を受けるこうした前提条件を看過することなく、「メディア・ナショナリズム」と「デモクラシー」の関連性を考察することにした。

社会構築主義的観点から「ネーション」の非実体性を強調した後、その「限界」として、メディアと国民国家の密接な結び付き、さらにはそれを支える「デモクラシー」という政治制度の存在を考察していくと、「メディア・ナショナリズム」の偏狭なる側面に私は思い至った。つまり「メディア」と「ナショナリズム」と「（大衆）デモクラシー」が一体となって駆動すれば、いつでも閉じられた、排他的で、偏狭な形のナショナリズムが展開されることが予想できるのではないかということだ。

そこでこうした「メディア・ナショナリズム」の限界を踏まえつつ、本発表の目的である「メディア・ナショナリズム」という概念の開かれた形に向けた刷新、その「可能性」を提示するにあたって、さいごに「リベラル・ナショナリズム」の考え方を導入した。リベラル・ナショナリズム論は「国民」による政治的な決定（自決権）を最大限擁護しつつ、社会的統合の基盤にナショナルな連帯を据え、なおかつリベラルなナショナリズムのあり方を提示する理論であった。すなわち、「国民」なる存在は必ずしも他者の排除や異質性の軽視を意味するものではないと捉え、リベラリズムの尊重を元に「共存」を模索する理論的動向である。かかる「リベラル・ナショナリズム論」を、「メディア・ナショナリズム」に接合することで、「メディア」と「ナショナリズム」と「デモクラシー」の 3 つの要素が排他的な方向に働くことを防ぎ、より開かれた「メディア・ナショナリズム」を提示することを試みたのであった。

以上のような理論的営為をつうじて、私は社会学や、政治学の知見を、己の卑小な能力の許す限り動員して、「メディア・ナショナリズム」の新たな側面を提示することが、少なからず

出来たものであると確信をしている。メディアもナショナリズムも閉じた側面と開かれた側面がある。「アンビバレンス」である。また「メディア・ナショナリズム」は非日常的な出来事において発動する場合と、本発表で強調したように、日常的に発動する場合との、二つの側面があるだろう。先行研究が、「メディアの閉鎖性／ナショナリズムの閉鎖性」という枠組みで、なおかつ出来事としては「日中摩擦」という「非日常性」を念頭に、この概念を提示したのに対し、私は「メディアの開放性／ナショナリズムの開放性」を際立たせ、日常的な営為にまで分析の枠組みを広げて、その開かれた可能性に言及した。メディアとナショナリズムの日常性に着目した M.ビリッグは、日常における偏狭な「ありふれたナショナリズム」が、より偏狭度を増した「熱いナショナリズム」の土台となることを指摘するものあったが、本発表は、日常における開放的な「ありふれたナショナリズム」が、非日常においても、寛容で理性的で冷静な「クールなナショナリズム」の土台となる可能性があることを仄めかした。そんな幾分、チャレンジングな内容であった事をいま振り返ってみて私は痛感をしている。

【参考文献】

Billig, M.(1995) *Banal Nationalism*, London: Sage

大石裕・山本信人編著(2006)『メディア・ナショナリズムのゆくえ 日中摩擦を検証する』朝日新聞社。

（たかぎ　ともあき　慶應義塾大学大学院社会学研究科）